

友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応

——中学生と大学生の比較——

千島雄太* 村上達也**

本研究では、現代青年に顕著なキャラを介した友人関係について、中学生と大学生の比較から検討が行われた。本研究の目的は、キャラの有無による心理的適応の相違に加えて、キャラの受け止め方とキャラ行動が心理的適応に及ぼす影響を明らかにすることであった。中学生 396 名と大学生 244 名に質問紙調査を行った。分析の結果、大学生は中学生よりもキャラがある者の割合が多く、キャラがない者よりも自己有用感が高いことが示された。因子分析の結果、キャラの受け止め方は、“積極的受容”、“拒否”、“無関心”、“消極的受容”の4つが得られた。得点とパス係数の比較を行った結果、学校段階で違いが見られた。中学生では、友人から付与されたキャラを受容しにくく、キャラに合わせて振る舞うことが、心理的不適応と関連することが明らかになった。一方で、大学生ではキャラ行動と適応には有意な関連が見られず、付与されたキャラを消極的にでも受け容れることが、居場所感の高さと関連していた。以上の結果から、中学生におけるキャラを介した友人関係の危うさについて議論された。

キーワード：友人関係，“キャラ”，心理的適応，中学生，大学生

問題と目的

現代青年の友人関係の特徴

青年期における友人関係は、安定化、社会的スキルの学習、モデル機能の役割を果たしていると考えられ(松井, 1990)、青年の心理的適応や発達にとって極めて重要である(Hartup & Stevens, 1997)。また、近年では、友人関係においてグループ志向が強いことや、その中でも内面的な関わりを避けて表面的な楽しさやつながりを重視する傾向が強いことが指摘されている(e.g., 土井, 2009)。実証的な研究としても、岡田(2010)は、現代青年の友人関係として“群れ指向群”、“関係回避群”、“気遣い関係群”などの群を抽出している。

友人関係における“キャラ”

そのような現代的な友人関係においては、“キャラ”という用語を用いたコミュニケーションが多用されている(土井, 2009; 瀬沼, 2007)。キャラとは、キャラクターの略語であり、集団の中での個人の立ち位置や役割を表す若者言葉である。種類として、“天然キャラ：いつもボーッとしている人、間の抜けた人”、“いじられキャラ：からかいの対象となる人、遊ばれる人”、“インキャラ：陰気な人”などがある(山西, 2013)。瀬沼(2007)は、キャラという言葉は1999年以降に青年の友人関係において現れ始めたことを指摘し、バラエティ番組等

に見られるようなキャラを介した人間関係を、現実の友人関係に取り入れることで定着したと論じている。キャラに関しては社会学観点からの論考がなされてきたが、千島・村上(2015)は、それらの先行研究を整理し、キャラを、“小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ”と定義した。本研究においても、この定義を採用することとする。

キャラを介したコミュニケーションの功罪

現代の青年は、なぜキャラを介したコミュニケーションを行うのであろうか。千島・村上(2015)は、大学生は友人関係の中でキャラがあることに対して、“コミュニケーションの取りやすさ”、“存在感の獲得”、“理解のしやすさ”というメリットを認知していることを明らかにしている。すなわち、キャラを介したコミュニケーションは、グループの中における個人の役割を付与し、わかりやすく楽しい人間関係を築くことに寄与していると考えられる。

一方で、キャラがあることにはデメリットも存在する。例えば、千島・村上(2015)は、“固定観念の形成”、“言動の制限”、“キャラへのとらわれ”というデメリットを大学生が認知していることを示している。また、社会学や教育学の観点からは、現代のいじめは、遊びや悪ふざけとの境界線が曖昧であり、キャラを介した“いじり関係”が、“いじめ関係”へと発展しやすいことについて論考されている(土井, 2009; 片岡, 2013; 向井, 2009)。すなわち、不快な冗談やからかいを受けた

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

** 筑波大学人間系

としても、当人に付与されたキャラによって、その行為が集団内で正当化され、行為がエスカレートすることでいじめへと発展することが考えられる。さらに、本間(2009)は、キャラを介した友人関係に特徴的な虚構性や軽さが、人間が感じるはずの痛みや悲しみへの想像力を忘れさせてしまう危険性を秘めていることを指摘している。

学校段階による相違

さて、千島・村上(2015)では、大学生を対象としたキャラに関する研究が行われているが、学校の教室内でキャラが生成・固定化されやすいこと(土井, 2009)や、いじめの認知件数は中学生で最も高いこと(文部科学省, 2013)を踏まえると、中学生におけるキャラを介した友人関係に焦点を当てる必要があると考えられる。中学生を対象にキャラに関する調査を行った本田(2011)では、“自分の気持ちと違っていても、人が求めるキャラを演じてしまうことがある”という質問に対して、“とてもあてはまる”, または“まああてはまる”に回答した者は、全体の34.5%に上った。そして、キャラを演じる傾向は、クラス内での地位が“低位”または“いじられ”である場合に多くなることや、“仲の良い友だちでも私のことをわかっていない”という気持ちや、“どこかに本当の自分がある”という感覚と正の関連があることを明らかにした。これらの結果は、中学生では、公的自己意識が高いこと(Rankin, Lane, Gibbons, & Gerrard, 2004)や自分が周囲から異質な存在に見られることへの不安が大学生よりも高いこと(高坂, 2010)などに起因するものと考えられる。

その一方で、大学生を対象とした千島・村上(2015)では、友人からキャラを付けられている者は全体の5割程度存在し、キャラがない者に比べて友人と群れる傾向にあり、キャラがあることに対してメリットを認知していることが示された。すなわち、大学生では自分にキャラがあることで、友人とのコミュニケーションを活性化させ、友人関係の中で存在感を得ることにつながりやすいと予測される。大学生では、中学生よりも、お互いの個性を認め合いたいという相互尊重の欲求が強く(榎本, 2000)、実際に被受容感や居場所感も高いことが明らかにされている(石本, 2010; 大久保, 2005)。このような友人関係における適応感の上昇も、キャラを介したコミュニケーションに影響を及ぼしているであろう。

以上のように、青年期前期にあたる中学生と青年期後期にあたる大学生では、キャラを介したコミュニケーションの諸相が異なることが推察されるため、本

研究において実証的な検討を行う。中学生よりも大学生でキャラを有する者が多く、大学生ではキャラがあることで居場所感が獲得されやすいことが予測される。

キャラの受け止め方と行動

さらに、本研究ではキャラを有している者に焦点を当て、キャラをどのように受け止めているか(以降、キャラの受け止め方と呼ぶ)とキャラに沿った振る舞いをどの程度行っているか(以降、キャラ行動と呼ぶ)という観点から詳細な検討を行う。

キャラには集団内で他律的に決定される(斎藤, 2011; 瀬沼, 2007)という性質がある以上、自分が望まないキャラを与えられる場合は少なくない。そのため、友人からキャラを付けられたとしても、そのキャラを受容しているとは限らず、与えられたキャラを嫌がっている可能性も考えられる。または、本人は、あまり気に入っていないが、やむを得ず受け容れているという場合もありえる。このようにキャラの受け止め方には個人差があると考えられる。本研究では、キャラの受け止め方に関して、与えられたキャラを受け容れていることを“積極的受容”と呼ぶ。また、与えられたキャラをしぶしぶ受け容れていることを“消極的受容”と呼び、積極的な受容と区別する。ニックネームの研究ではあるが、三好(1999)では、与えられたニックネームを受容するわけでも拒否するわけでもなく、広まったから仕方ないと感じている女子中学生の回答が例示されている。さらに、与えられたキャラを明らかに嫌がっている“拒否”に加えて、勝手に友人が“_____キャラ”だと言っているだけで、本人は興味がない場合も考えられる。そこで本研究では、このような受け止め方を“無関心”と呼ぶ。近年、友人関係そのものに関心が薄い青年が増えてきていることが指摘されており(福重, 2006; 岡田, 2010)、NHK放送文化研究所が行った中学生と高校生を対象にした調査によると、友だちづきあいに関心がある者の割合が、2002年から2012年にかけて7%減少している(政木, 2013)。友人関係に関心が薄い者は、自分がどのようなキャラであろうと気にしないと考えられる。以上から、本研究では、キャラの受け止め方として、“積極的受容”、“拒否”、“消極的受容”、“無関心”の4つを設定する。また、キャラに無関心な場合は、キャラ行動が促進されにくいことが考えられ、付与されたキャラをどのように受け止めるかによって、キャラに沿った振る舞いをするか否かが異なると予測される。

キャラの受け止め方と行動が心理的適応に及ぼす影響

先述の通り、本田(2011)では、中学生に対する調査

結果から、キャラを演じることが本来感などの適応変数と負の関連があることが実証されている。また、堀田・無藤(2001)においても、中学生が友人関係における役割を意識して見せかけの行動を行うほど適応が阻害されやすいことが示されている。ここから、中学生においてはキャラを演じることが心理的適応を損なうことにつながるということが予測されるが、大学生に関しては検討が行われていないため、本研究において検討を行う。

また、吉岡(2007)は、友人関係満足感が低い者は、友人関係の中で適切な役割を演じることに葛藤を抱えていることを明らかにしている。これは、役割を演じるという行動だけでなく、行動を起こす前の心理状態によっても、適応感が左右されることを意味している。例えば、受け容れ難いキャラを付与された場合、キャラを演じるかどうか躊躇するとともに、本人にとってその友人関係が居場所として機能しにくくなることが推察される。そのため、本研究においては、キャラの受け止め方が心理的適応に及ぼす影響についても検討を行う。

以上の議論から、本研究では第1にキャラの受け止め方、第2にキャラ行動、第3に心理的適応というプロセスモデルを仮定する。その際、キャラの受け止め方と心理的適応への直接的な影響も考慮する。本研究で検討するモデルをFigure 1に図示した。このモデルを用いて、中学生と大学生の比較を行う。

なお、心理的適応の指標として、自尊感情と居場所感について検討する。自尊感情は、心理的適応の1つとして位置づけられており(Seaton, 2009)、友人関係を扱った多くの先行研究(e.g., Keefe & Berndt, 1996)で心理的適応の指標とされている。また、千島・村上(2015)では、キャラがあることで、居場所感を獲得できるというメリットが挙げられているため、本研究においても、居場所感について検討を行う。

本研究の目的

本研究の目的は、以下の2点とする。第1に、キャラの有無による心理的適応の相違を明らかにすることである。第2に、キャラがある者におけるキャラの受

け止め方とキャラ行動が心理的適応に及ぼす影響を明らかにすることである。いずれも中学生と大学生の比較による分析を行う。

方 法

調査協力者

関東地方の1校の公立中学校と四国地方の1校の公立中学校に在籍している中学1-2年生396名(男性216名, 女性179名, 不明1名; 平均年齢13.28歳, $SD=0.66$), 関東地方の1校の国立大学, 1校の私立大学に在籍している大学2-4年生244名(男性83名, 女性159名, 不明2名; 平均年齢20.97歳, $SD=0.86$)の計640名(男性299名, 女性338名, 不明3名; 平均年齢16.20歳, $SD=3.81$)であった。

実施手続きと倫理的配慮

調査は、2013年12月-2014年1月に行われた。授業時間やホームルームの一部を利用して、調査協力者に一斉に質問紙を配布し、その場で回収した。調査は無記名式であり、回答は任意であること、回答を拒否したり中断したりすることができること、回答を拒否したり中断しても調査協力者に不利益は生じないことなどを紙面に明記し、口頭でも伝えた。なお、調査は第1著者および第2著者の所属機関に設置された研究倫理委員会の承認を得て実施された。

調査内容

1. デモグラフィック変数：年齢, 性別, 学年を尋ねた。

2. キャラの有無と種類：千島・村上(2015)を参考に、キャラの有無と種類について尋ねた。“あなたは、普段、友だちから‘あなたは、____キャラだね’などと言われることがありますか。自分が友だちからよく言われるキャラの名前を、下の空欄に書き入れてください。キャラが複数ある場合は、最もよく言われるキャラの名前を書いてください。”と教示し、“____キャラ”という空欄を1つ設けた。さらに、“思いつかない場合や、‘____キャラ’と言われない場合は、チェックを入れてください。”と教示し、“全く思いつかない”、“____キャラだと言われない”というチェック欄を設けた。チェックを付けた者は、次の3. キャラの受け止め方や4. キャラ行動の質問には回答せず、それ以降の質問へと進むよう教示した。空欄にキャラ名を記入した者を“キャラあり群”とし、いずれかにチェックを付けた者を“キャラなし群”とした。

3. キャラの受け止め方(16項目)：キャラあり群において、友人から付与されたキャラをどのように受け止めているかを測定するために、独自に項目を作成した。

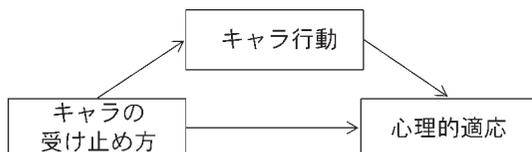


Figure 1 本研究で検討するプロセスモデル

千島・村上 (2015) で作成された“キャラがあると、会話がはずみやすい”などの項目では、回答者が回答者本人に付与されたキャラに関して答えているのか、他者におけるキャラや一般的なキャラのイメージについて答えているのか判断が付かないという問題が指摘されている。そのため、本研究では、項目表現を“_____キャラ”とすることで、回答者本人のキャラを想定しながら回答できるように配慮した。“積極的受容 (項目例: 自分は、“_____キャラ”であることが嬉しい)”, “拒否 (項目例: 自分が、“_____キャラ”だと言われるのは、ふゆかいだ)”, “消極的受容 (項目例: 友だちに“_____キャラ”として扱われるのはやむをえないと思う)”, “無関心 (項目例: 自分が“_____キャラ”であろうとなかろうと、どちらでもよい)”の4下位尺度を想定し、4項目ずつ作成した。“質問2で回答したあなたのキャラについてお聞きます。以下の項目は、現在のあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまると思う数字を1-5から選んで、一つ丸をつけて下さい。”と教示し、5件法で回答を求めた。

4. キャラ行動 (3項目): キャラあり群において、友人から付与されたキャラに沿った振る舞いをどの程度行っているかを測定するために、独自に3項目を作成した (項目例: 普段から、“_____キャラ”としてふるまっている)。教示や回答形式は3. キャラの受け止め方と同一であった。

5. 自尊感情 (8項目): 山本・松井・山成 (1982) で作成された自尊感情尺度を使用した。本尺度は成人用が開発され、本来10項目から構成されている。しかし、中学生を対象に含めた伊藤 (2001) では、“自分に対して肯定的である”と“もっと自分自身を尊敬できるようになりたい”の2項目のあてはまりが悪いことが示されている。特に、前者の項目は中学生に理解されていない可能性が示唆されている。そのため、本研究においても当該の2項目を除外した。“以下の項目は、現在のあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまると思う数字を1-5から選んで、一つ丸をつけて下さい。”と教示し、5件法で回答を求めた。

6. 居場所感 (13項目): 石本 (2010) で作成された居場所感尺度を使用した。本尺度は“自己有用感”と“本来感”の2下位尺度から構成されている。本尺度には、関係性ごとに挿入する語句が異なる項目があるが、本研究では友人関係における居場所感を測定するため、“友だち”を挿入した。“友だちと一緒にいる時のことを思い浮かべてください。以下の項目は、現在のあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまる

と思う数字を1-5から選んで、一つ丸をつけて下さい。”と教示し、5件法で回答を求めた。

上述した尺度における5件法の回答ラベルは、全て“1. まったくあてはまらない, 2. あまりあてはまらない, 3. どちらともいえない, 4. 少しあてはまる, 5. とてもよくあてはまる”であった。

結 果

キャラの有無の割合と心理的適応との関連

まず、全体のデータでキャラの有無の割合を算出したところ、キャラあり群が41.4%、キャラなし群が58.6%であった。千島・村上 (2015) では、キャラの種類が“友人関係における役割”と“当人の性格特性”に分類されているため、本研究においてもその分類に当てはめる形で集計を行った。集計は、心理学を専攻する大学教員1名と大学院生1名で行われた。その結果、キャラあり群のうち、友人関係における役割が59.4%、当人の性格特性が40.6%であった。本研究では、キャラの種類ではなく、キャラの有無による相違を明らかにすることを目的としているため、以降の分析では、キャラの種類については扱わないこととした。

学校段階とキャラの有無の割合に連関があるかどうかを検討するために、 χ^2 検定を行った (Table 1)。その結果、有意な連関が示され ($\chi^2=41.46, p<.001, V=.26$)、中学生では、キャラなし群の出現率が高く、大学生では、キャラあり群の出現率が高いことが示された。

次に、学校段階とキャラの有無を要因とし、自尊感情、自己有用感、本来感の3つの心理的適応に関する変数を従属変数とした分散分析を行った (Table 2)。なお、心理的適応の変数の α 係数は、自尊感情で.86、自己有用感で.89、本来感で.87と高かったため、各項目の得点の加算平均を算出した。分散分析の結果、自尊感情では学校段階の主効果が有意であり、大学生の得点が中学生よりも高かった。自己有用感では、交互作用が有意であり、単純主効果検定の結果、大学生にお

Table 1 学校段階とキャラの有無のクロス集計表

		キャラあり群	キャラなし群	合計
中学生	<i>n</i>	125	271	396
	%	31.6%	68.4%	100.0%
大学生	<i>n</i>	140	104	244
	%	57.4%	42.6%	100.0%
合計	<i>n</i>	265	375	640
	%	41.4%	58.6%	100.0%

Table 2 学校段階とキャラの有無を要因とした心理的適応に関する得点の二要因分散分析結果

	中学生		大学生		学校段階 主効果		キャラの有無 主効果		交互作用	
	有	無	有	無	F 値	η^2	F 値	η^2	F 値	η^2
自尊感情	2.92 (0.88)	2.98 (0.79)	3.26 (0.77)	3.12 (0.87)	11.75** $df=1,622$ 中<大	.02	0.45 $df=1,622$.00	2.13 $df=1,622$.00
自己有用感	2.98 (0.86)	3.05 (0.84)	3.40 (0.68)	3.19 (0.76)	16.66*** $df=1,622$.03	0.94 $df=1,622$.00	4.39* $df=1,622$ 大:無<有;有:中<大	.01
本来感	3.33 (0.93)	3.51 (0.90)	3.56 (0.79)	3.51 (0.85)	2.42 $df=1,620$.00	0.74 $df=1,620$.00	2.38 $df=1,620$.00

注1) 中:中学生 大:大学生 有:キャラあり群 無:キャラなし群

注2) * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

いて、キャラあり群の得点がキャラなし群よりも高かった。また、キャラあり群において、大学生の得点が中学生よりも高かった。本来感では、有意な結果が示されなかった。

キャラの受け止め方項目とキャラ行動項目の分析

以降の分析は、キャラに関して尋ねた項目を使用するため、キャラあり群のみを分析対象とする。まず、

キャラあり群の全てのデータを用いて、キャラの受け止め方16項目について、探索的因子分析を行った (Table 3)。因子数を4に設定した上で、最尤法・プロマックス回転を用いた。その結果、“キャラの消極的受容”の項目として作成された“周りからつけられた自分のキャラをしぼしぼ受け入れている”と“周りの友だちが自分のことを‘____キャラ’だと言うなら、そ

Table 3 キャラの受け止め方項目の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転後)

	F1	F2	F3	F4	h^2	M	(SD)
キャラの積極的受容 ($\alpha = .91 : .91 / .91$)							
自分は、“____キャラ”であることが嬉しい。	.93	.02	-.03	-.04	.80	2.66	(1.07)
“____キャラ”であることに満足している。	.90	.07	.03	-.04	.71	2.77	(1.11)
自分は、“____キャラ”であることを気に入っている。	.81	-.06	.00	.03	.74	2.85	(1.16)
自分は、周りがつけた“____キャラ”をよるこんで受け入れている。	.68	-.14	-.01	.08	.67	3.11	(1.21)
キャラの拒否 ($\alpha = .84 : .86 / .81$)							
自分が、“____キャラ”だと言われるのは、ふゆかいだ。	.07	.89	-.04	-.02	.73	2.32	(1.14)
自分を“____キャラ”として扱わないでほしい。	-.04	.83	.05	-.05	.74	2.48	(1.17)
自分は、“____キャラ”と言われるのが嫌いだ。	-.16	.65	-.01	.05	.57	2.39	(1.15)
自分は、“____キャラ”じゃないのにとすることがある。	.03	.62	.01	.05	.35	2.97	(1.32)
キャラへの無関心 ($\alpha = .77 : .73 / .81$)							
自分が“____キャラ”であろうとなかろうと、どちらでもよい。	-.01	-.02	.91	-.02	.82	3.43	(1.23)
自分がどんなキャラであろうとどうでもいい。	-.07	.09	.75	-.01	.54	3.27	(1.26)
周りが自分にどんなキャラをつけてもかまわない。	.13	-.09	.54	.07	.42	2.98	(1.28)
キャラの消極的受容 ($\alpha = .76 : .73 / .72$)							
友だちに“____キャラ”として扱われるのは、やむをえないと思う。	-.03	.06	-.01	1.02	1.00	3.30	(1.12)
周りから“____キャラ”だと言われるのは、しょうがないと思う。	.03	-.04	.02	.61	.40	3.54	(1.12)
	因子間相関						
	F1	F2	F3	F4			
	F1						
	F2	-.69					
	F3	.15	-.21				
	F4	.30	-.19	.33			

注1) 因子分析の因子負荷量が.40以上のものを網掛けで示した。

注2) α 係数は、全体:中学生/大学生の順で示した。

うなのだ」と割り切っている”の2項目が、いずれの因子にも.40未満の因子負荷量を示した。さらに、“キャラへの無関心”の項目として作成された“周りの友だちが自分につけたキャラには興味がない。”の1項目が、内的一貫性を大きく下げている。そのため、当該の3項目を除外し、再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。得られた因子パターンをTable 3に示す。4因子での説明可能な分散の総和の割合は、62.4%であった。各因子は全て想定した通りの項目でまとまったため、第1因子を“キャラの積極的受容”,第2因子を“キャラの拒否”,第3因子を“キャラへの無関心”,第4因子を“キャラの消極的受容”と命名した。 α 係数は、順に.91,.84,.77,.76であり、十分な内的一貫性が確認された。そこで、因子ごとに各項目の加算平均を算出し、得点化を行った。

続いて、キャラ行動3項目(Table 4)について、主成分分析を行ったところ、いずれも一次元性が確認された。 α 係数は.81であり、十分な内的一貫性が確認された。そこで、各項目の得点の加算平均を算出し、得点化を行った。

以上の手続きで得られた得点を、学校段階ごとに比較するために、対応のない t 検定を行った (Table 5)¹。その結果、キャラの積極的受容、キャラの消極的受容、キャラ行動において、大学生の得点が中学生よりも高いことが示された。

パス解析

キャラあり群のうち、欠損値のない236名(中学生107名,大学生129名)のデータを用いて構造方程式モデリングによるパス解析を行った。パス解析に使用した変数間の相関係数をAppendixに示した。中学生と大学生のモデルの相違を検討するため、多母集団同時分析を

Table 4 キャラ行動項目の主成分分析結果

キャラ行動 ($\alpha = .81 : .81 / .80$)	第1成分	M	(SD)
普段から、“_____キャラ”としてふるまっている。	.89	2.62	(1.26)
自分は、“_____キャラ”にそった行動をしている。	.86	3.15	(1.26)
“_____キャラ”を演じることがよくある。	.81	2.53	(1.38)
固有値		2.19	
寄与率(%)		73.11	

注) α 係数は、全体：中学生/大学生の順で示した。

行った (Figure 2)。両群どちらも有意でないパス係数を削除した上で、変数間のパス係数に等値制約を施し、モデル比較を行った。その結果、等値制約を施さないモデルにおいて、よりあてはまりが良いことが示された (等値制約ありモデル AIC=138.07, 等値制約なしモデル AIC=130.34)。等値制約を施さないモデルの適合度は、 $\chi^2(20)=26.34, n.s., GFI=.97, AGFI=.90, CFI=.99, RMSEA=.04$ となり、モデルの十分なあてはまりが確認された。これらの結果から、中学生と大学生において、同じモデルが適用できるものの、パス係数の値の大きさは異なることが示唆された。そこで、中学生と大学生でパス係数の一対比較を行ったところ、キャラの消極的受容から自己有用感 ($z=1.99, p<.05$) と本来感 ($z=2.10, p<.05$) へのパス係数において有意差が示された。いずれも大学生の係数 (順に、 $\beta=.21, p<.01; \beta=.18, p<.05$) の方が中学生の係数 (順に、 $\beta=.01, n.s.; \beta=-.05, n.s.$) よりも高かった。また、キャラ行動から自尊感情 ($z=3.12, p<.01$)、自己有用感 ($z=2.01, p<.01$)、本来感 ($z=3.10, p<.01$) へのパス係数において有意差が示された。いずれも中学生の係数 (順に、 $\beta=-.36, p<.001; \beta=-.31, p<.01; \beta=-.40, p<.001$) が大学生の係数 (順に、 $\beta=.04, n.s.; \beta=$

Table 5 学校段階ごとのキャラに関する得点の t 検定結果

	中学生		大学生		t 値	df	d
	M	(SD)	M	(SD)			
キャラの積極的受容	2.66	(1.12)	3.01	(0.88)	2.80**	239	.35
キャラの拒否	2.57	(1.13)	2.52	(0.82)	0.41	224	.05
キャラへの無関心	3.10	(1.08)	3.34	(0.98)	1.89	263	.23
キャラの消極的受容	3.03	(1.11)	3.76	(0.77)	6.10***	218	.77
キャラ行動	2.55	(1.11)	2.96	(1.08)	2.93**	247	.37

注) ** $p<.01$ *** $p<.001$

¹ 学校段階と性差を要因とした二要因分散分析を行った結果、キャラの受け止め方では性別の主効果が示されず、キャラ行動のみで性別の主効果が有意であり、男性の方が女性よりも得点が高かった ($F=5.27, df=1,244, p<.05, \eta^2=.02$)。交互作用

は、いずれの変数も有意ではなかった。性別による得点の相違は部分的であること、性差の検討は本論文の目的に沿わないことを踏まえ、性別を要因とせずに分析を行った。

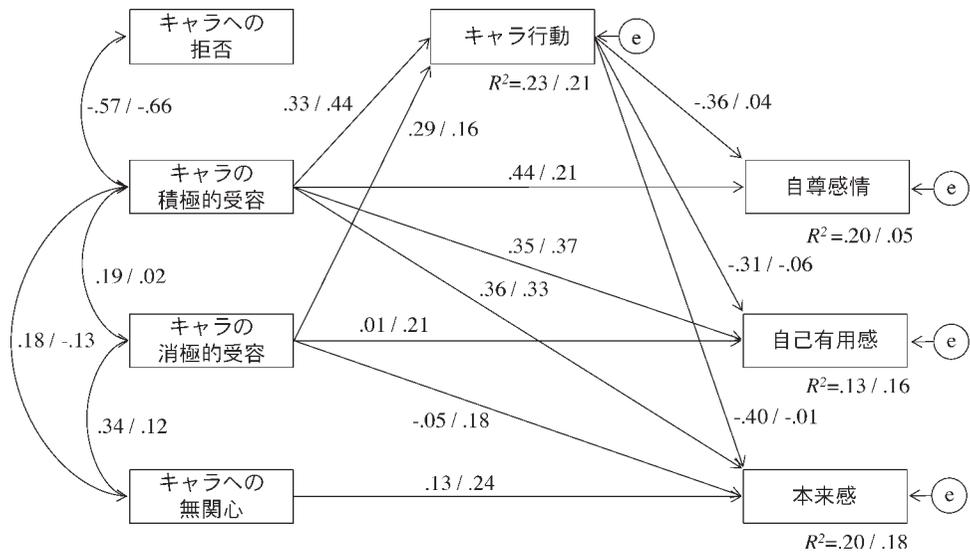


Figure 2 学校段階別のキャラの受け止め方，キャラ行動，心理的適応の関連

$\chi^2(20) = 26.34, n.s., GFI = .97, AGFI = .90, CFI = .99, RMSEA = .04, AIC = 130.34$

注1) 多母集団同時分析のパス係数に等値制約を施さないモデルの結果を示した。

注2) 図の煩雑さを避けるため，誤差間相関は省略した。

注3) 各係数の値を，中学生/大学生の順で示した。

-.06, *n.s.*; $\beta = -.01, n.s.$) よりも低かった。

考 察

本研究の目的は，第1にキャラの有無による心理的適応の相違，第2にキャラあり群におけるキャラの受け止め方とキャラ行動が心理的適応に及ぼす影響を明らかにすることであった。以下では得られた結果に基づいて，学校段階の比較に着目して考察を行う。

キャラの有無による相違

キャラの有無の割合を学校段階ごとに比較した結果，中学生でキャラなし群が多く，大学生でキャラあり群が多いことが示された。中学生は，友人との同調性が強く，友人と異質な存在に見られることを好まない傾向にある(石本他, 2009; 高坂, 2010)。そのため，キャラを付与することで，当人の個性や人と違う特徴を際立たせることを避けていると考えられる。大学生においては，友人関係の中で異質性を許容する傾向が高まることで，キャラを有する者の割合が上昇するのであろう。このように考えるならば，中学生では，類似性が重視されるチャム・グループが形成されやすく，高校生以降では，異質性を許容するピア・グループが顕著になるという従来の理論(保坂・岡村, 1986)とも整合性

が取れた結果であるといえる。

また，二要因分散分析によって，大学生においてキャラあり群で自己有用感が高いことが示された。大学生では友人からキャラを付与されることを，周りから存在を認められ，友人に関心を持たれているという肯定的な意味合いとして捉えていると推察される。千島・村上(2015)においても，キャラあり群は，キャラなし群よりも，キャラがあることのメリットを認知しやすいことが示されており，先行研究と同様の結果が得られた。

キャラの受け止め方と行動

キャラを有する者のうち，中学生においては，大学生よりもキャラの積極的受容と消極的受容が低く，キャラに沿った振る舞いもあまりしていないことが明らかになった。中学生は，友人との関係性に特に気を遣い，からかわれたり，笑いのものにされることに敏感であることが指摘されている(cf., McLachlan, Zimmer-Gembeck, & McGregor, 2010)。そのため，キャラによって友人にからかわれることを恐れて，与えられたキャラを受け容れにくいことが考えられる。

一方で，大学生は，キャラを受け容れやすく，積極的にキャラ行動を行いやすいことが示された。先述の

通り、大学生は自分のキャラによって、友人関係における自己有用感を高めており、自ら進んでそのキャラに沿った行動をして、さらに存在感を出そうとすることが推察される。

キャラの受け止め方と行動が心理的適応に及ぼす影響

学校段階にかかわらず、キャラの積極的受容は全ての心理的適応と正の関連を示した。付与されたキャラを気に入っており、それに満足しているということは、自分に合ったキャラが付けられており、友人からの被理解感が高いことを意味する。また、その場合は、キャラを自分の特徴として引き受けているため、自尊感情も促進されることが考えられる。さらに、中学生と大学生ともに、キャラへの無関心は本来感と正の関連が示された。中園・野島(2003)や橋本(2000)では、友人関係への“無関心群”が抽出されており、友人と自然界で接するように心がける傾向にあることや、対人ストレスやGHQの得点が低いことが明らかにされている。友人関係に関心が薄い群は、当然キャラに対しても無関心である可能性が高く、友人の付けたキャラによって自己評価が揺るがないために、本来感が高いと推察される。

一方、大学生では、キャラの消極的受容と居場所感に正の関連が示された。先述の通り、大学生はキャラがある者がいない者よりも自己有用感が高いため、付与されたキャラが自分の特徴にそぐわない場合や、やや不満のある場合でも、それを引き受けることで居場所感を得ることにつながっていると考えられる。表面的なつながりを重視する現代の大学生にとって、キャラがあること自体が居場所感の獲得につながっており(千島・村上, 2015)、たとえそのキャラが気に入らないものであったとしても、それを受け容れることで友人とのつながりを維持しているのであろう。消極的な受容であっても適応の高さと関連することは、本研究で得られた示唆深い結果であり、今後さらなる検討を行う必要がある。

また、大学生とは異なり、中学生では、キャラ行動をするほど心理的適応は損なわれやすいという結果が得られた。これは、本田(2011)や堀田・無藤(2001)の結果と同様の結果であった。これまでの結果も踏まえると、中学生と大学生において、キャラに沿って振る舞うという行為の意味合いが大きく異なることが窺える。すなわち、中学生にとっては、友人から与えられた受け容れ難いキャラに沿って行動することは、演技性や苦痛を伴うものであるため、心理的適応を大きく損なうことに影響するのであろう。一方で、大学生に

とってキャラに応じて振る舞うということは、日常的なコミュニケーションの一環であり、自尊感情や居場所感に大きく影響するものではないことが推察される。大学生は中学生よりも、人間関係に応じて振る舞い方を変えることについて、“必要”であり、“自然”であると感じやすい(佐久間, 2006)ことから、大学生はキャラに沿って振る舞うことに違和感が少ないと考えられる。

本研究で得られた結果の総括と意義

本研究では、学校段階における比較から、以下のような知見が得られた。中学生は、キャラを有する者の割合が少なく、友人からキャラを付与されたとしてもそのキャラを受容せず、キャラに合わせた振る舞いをするのが、心理的不適応と関連することが明らかになった。一方で大学生は、比較的キャラがある者の割合が多く、キャラの受容や行動も多かった。さらに付与されたキャラを消極的にでも受け容れることで、居場所感を得ている可能性が示された。

このことは、友人関係において用いられるキャラという新しいコミュニケーション方略から、現代青年の友人関係の特徴や、中学生と大学生における友人との付き合い方の相違点を明示することに寄与したと考えられる。特に、友人からキャラを与えられることや、与えられたキャラに合わせて振る舞うことの意味合いが、中学生と大学生では大きく異なることが示唆された。すなわち、大学生においては、比較的キャラを自分自身の一部として受容しており、心理的適応を保ちながらキャラを介して円滑に友人と付き合い合うことができるのに対して、中学生においては、付与されたキャラを受容しにくく、受け容れ難いキャラを演じることで、適応が損なわれやすいことが明らかになった。これらのことは、中学生におけるキャラを介したコミュニケーションの危うさを示唆している。友人との関係性や友人の気持ちを考慮せずに、キャラを付けて扱うことは、からかいやいじめにつながりかねないため、注意する必要がある。

本研究の限界

以下に、本研究の限界を3点述べる。第1に、本研究の分析が、中学生と大学生の比較に留まっていることである。中学生と大学生では、置かれている学校環境が異なるため、本研究の結果が学校環境の相違に起因する可能性も考えられる。すなわち、一般的に中学校の友人関係は教室の中で形成されることが多く、比較的閉鎖的な関係性であるのに対し、大学生は友人を作る機会や新たな人間関係を構築する場が数多く存在

し、比較的オープンな関係性であるといえる。そのため、中学生では、限られた人間関係を壊さないように、キャラに合わせて振る舞わざるを得ない一方で、大学生ではキャラを付けたりキャラに合わせて振る舞ったとしても適応を損なにくいとも考えられる。このような問題を解決するには、同年齢で異なる学校環境に身を置く者を比較することや、発達連続性を重視し、高校生のデータも含めた上で総合的に判断する必要がある。また、本研究では、性差に主眼を置かなかったが、男性の方がキャラを演じる傾向が高いという結果に関しては、今後その背景を含めた詳細な検討が望まれる。

第2に、キャラなし群が全体で58.6%の割合でいることにも注意すべきであろう。例えば、石本他(2009)は友人関係スタイルを同調性と心理的距離の2軸から捉えているが、キャラを介したコミュニケーションを行わない者は、友人への同調性が低い可能性が考えられる。その上で、キャラなし群の友人関係は、心理的距離が近い“尊重群”にあたるのか、または心理的距離が遠い“孤立群”にあたるのかなど、キャラを付与し合わない関係性についても今後明らかにすべきであろう。

第3に、キャラの種類イメージに関して具体的な検討が必要である。本研究では先行研究に倣って、キャラの種類を“友人関係における役割”と“当人の性格特性”を表す2つに分類した。しかし、より具体的に1つ1つのキャラの内容自体がどのように評価されるのかという点を検討することで、中学生におけるキャラ行動と心理的不適応の関連をより明確に説明できる可能性がある。

今後の展望

本研究で得られた知見に基づいて、今後の研究に向けた展望を3点述べる。第1に、縦断調査による知見を蓄積する必要がある。本研究は一時点の横断的な調査であるため、プロセスモデルの因果関係については実証できなかった。今後、心理的適応がキャラの受け止め方や行動に影響するなどの逆のパスも想定しながら、本研究で得られたモデルを精緻化していくことが望まれる。また、中学生ではキャラに沿った振る舞いによって心理的適応が損なわれやすいことなどが示されたが、これは一時点の結果であることに留意する必要がある。すなわち、キャラ行動の経験はその後の対人関係スキルの向上に寄与するなど、長期的に見ればポジティブな影響を持つことも考えられる。このような可能性についても、縦断調査によって検討すべきで

あろう。

第2に、いじめやからかいとの直接的な関連を検討することが望まれる。先行研究(土井, 2009; 片岡, 2013; 向井, 2010)で指摘されているような、キャラを用いた“いじり関係”が“いじめ関係”へと発展する可能性について、実証的な検討が行われるべきである。その際には、友人グループの特性や学級風土を視野に入れることが重要であろう。例えば、三島(2003)は、小学生の学級内における呼称と勢力関係について検討し、女子児童において、“ちゃん付け”や“あだ名”で呼ばれる児童は、“さん付け”で呼ばれる児童よりも、勢力が強いことを示している。

第3に、より主体的なキャラ行動について検討することが望まれる。本研究では、与えられたキャラに合わせるという行動を扱ったが、“キャラ作り”という言葉から連想されるような、自主的にキャラを押し出す行動もある。さらには、本研究では、最もよく言われる1つのキャラについて記入を求めたが、関係性に依りて複数のキャラが使い分けられる場合も考慮する必要があるであろう。以上のような課題に取り組むことによって、現代の青年におけるキャラを介した友人関係の研究が蓄積されることが期待される。

引用文献

- 千島雄太・村上達也 (2015). 現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連—“キャラ”に対する考え方を中心に—青年心理学研究, **26**, 129-146. (Chishima, Y., & Murakami, T. (2015). Relationship between friendship with “Chara” and friendship satisfaction among contemporary adolescents: Focusing on thoughts about “Chara”. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **26**, 129-146.)
- 土井隆義 (2009). キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像— 岩波書店 (Doi, T.)
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453. (Enomoto, J. (2000). Friendship among adolescents: Needs and their relation to emotions and activities. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 444-453.)
- 福重 清 (2006). 若者の友人関係はどうなっているのか 浅野智彦(編) 検証・若者の変貌—失われた10年の後に— 勁草書房 (Fukushige, K.)

- Hartup, W. W., & Stevens, N. (1997). Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin*, **121**, 355-370.
- 橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, **48**, 94-102. (Hashimoto, T. (2000). Interpersonal stress events, social skills, and interpersonal strategies in undergraduate students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 94-102.)
- 本田由紀 (2011). 学校の「空気」—若者の気分— 岩波書店 (Honda, Y.)
- 本間友巳 (2009). 「いじられキャラ」となっている子をどう考え、どう支援するか 児童心理, **63**, 530-534. (Homma, T.)
- 堀田仁美・無藤 隆 (2001). 青年期における見せかけの自己行動と友人関係の適応感および精神的健康との関連 お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要, **3**, 79-91. (Horita, H., & Muto, T.)
- 保坂 亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討—ある事例を通して— 心理臨床学研究, **4**, 15-26. (Hosaka, T., & Okamura, T. (1986). Development and therapeutic implications in campus encounter groups. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **4**, 15-26.)
- 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響 発達心理学研究, **21**, 278-286. (Ishimoto, Y. (2010). The influence of a sense of ibasho on psychological and school adjustment in adolescence and emerging adulthood. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **21**, 278-286.)
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長 然・則定百合子・日瀨淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, **20**, 125-133. (Ishimoto, Y., Kukawa, M., Saito, S., Kaminaga, M., Norisada, Y., Higata, A., & Moriguchi, R. (2009). Relations between friendship styles, psychological adjustment, and school adjustment among adolescent females. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **20**, 125-133.)
- 伊藤裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達—自尊感情、身体満足度との関連から— 教育心理学研究, **49**, 458-468. (Ito, Y. (2001). Development of gender identity in female adolescents: Self-esteem and degree of satisfaction with their physique. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 458-468.)
- 片岡洋子 (2013). いじめのなかの子どもたち 教育科学研究会(編) いじめと向き合う (pp.12-35) 旬報社 (Kataoka, Y.)
- Keefe, K., & Berndt, T. J. (1996). Relations of friendship quality to self-esteem in early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, **16**, 110-129.
- 高坂康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連— 教育心理学研究, **58**, 338-347. (Kosaka, Y. (2010). Adolescents' anxieties about being thought different from others and the tendency toward uniformity in their friendship groups. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **58**, 338-347.)
- 政木みき (2013). ネットでつながる身近な友だち NHK放送文化研究所(編). NHK中学生・高校生の生活と意識調査2012—失われた20年が生んだ“幸せ”な十代— (pp. 55-92) NHK出版 (Maki, M.)
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編). 社会化の心理学ハンドブック—人間形成と社会と文化— (pp. 283-296) 川島書店 (Matsui, Y.)
- McLachlan, J., Zimmer-Gembeck, M. J., & McGregor, L. (2010). Rejection sensitivity in childhood and early adolescence: Peer rejection and protective effects of parents and friends. *Journal of Relationships Research*, **1**, 31-40.
- 三島浩路 (2003). 学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究 教育心理学研究, **51**, 121-129. (Mishima, K. (2003). How children address each other in class and in peer relations: Power balance and group membership. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **51**, 121-129.)
- 三好智子 (1999). 女子中学生のニックネームについての探索的研究 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, **3**, 128-137. (Miyoshi, T.)
- 文部科学省 (2013). 平成25年度「児童生徒の問題

- 行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」等結果について Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1351936.htm (2014年12月24日)
- 向井 学 (2010). 「いじめの社会理論」の射程と変容するコミュニケーション 社会学批評, 3, 3-12. (Mukai, M.)
- 中園尚武・野島一彦 (2003). 現代大学生における友人関係への態度に関する研究—友人関係に対する「無関心」に注目して— 九州大学心理学研究, 4, 325-334. (Nakazono, N., & Nozima, K.)
- 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己—現代青年の友人認知と自己の発達— 世界思想社 (Okada, T.)
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319. (Okubo, T. (2005). Factors contributing to subjective adjustment to school in adolescents. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 53, 307-319.)
- Rankin, J. L., Lane, D. J., Gibbons, F. X., & Gerrard, M. (2004). Adolescent self-consciousness: Longitudinal age changes and gender differences in two cohorts. *Journal of Research on Adolescence*, 14, 1-21.
- 斎藤 環 (2011). キャラクター精神分析—マンガ・文学・日本人— 筑摩書房 (Saito, T.)
- 佐久間路子 (2006). 幼児期から青年期にかけての關係的自己の発達 風間書房 (Sakuma, M.)
- Seaton, C. L. (2009). Psychological adjustment. In S. J. Lopez (Ed.), *The encyclopedia of positive psychology* (pp. 796-801). Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- 瀬沼文彰 (2007). キャラ論 STUDIOCELLO (Senuma, M.)
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68. (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamana-ri, Y. (1982). The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 30, 64-68.)
- 山西治男 (2013). 若者 現代用語の基礎知識編集部 (編). 現代用語の基礎知識2014年版 (pp. 1173-1181) 自由国民社 (Yamanishi, H.)
- 吉岡和子 (2007). 友人関係における“自己の在り方をめぐる葛藤”に関する研究 九州大学心理学研究, 8, 195-200. (Yoshioka, K.)

謝 辞

データ収集にご尽力いただいた佐藤有耕先生(筑波大学), 相羽美幸先生(東洋学園大学), 中学校の先生方に厚く御礼申し上げます。また, 調査に回答して下さった中学生・大学生の方々に, 心より感謝申し上げます。加えて, 筑波大学の学生である河村綾花さん, 小林篤史さん, 笹森光馬さん, 若木祥太さんには, 研究の遂行に大きく貢献していただきました。ここに記して感謝いたします。

付 記

本論文の一部は, 日本教育心理学会第56回総会にて発表されている。

(2015.1.9 受稿, '15.6.17 受理)

Appendix パス解析に使用した変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. キャラの積極的受容	-	-.65***	-.04	.10	.46***	.22**	.36***	.29***
2. キャラの拒否	-.63***	-	-.13	-.12	-.24**	-.27**	-.24**	-.22**
3. キャラへの無関心	.31**	-.25**	-	.17*	-.01	.10	-.02	.26**
4. キャラの消極的受容	.29**	-.15	.34***	-	.22*	.00	.20*	.23**
5. キャラ行動	.40***	-.21*	.15	.36***	-	.14	.15	.14
6. 自尊感情	.29**	-.22*	.00	-.13	-.18	-	.53***	.49***
7. 自己有用感	.24**	-.23**	-.03	-.07	-.14	.64***	-	.65***
8. 本来感	.24**	-.29**	.09	-.09	-.23*	.52***	.68***	-

注1) 左下に中学生の結果, 右上に大学生の結果を示した。

注2) * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Relation Between Acceptance of Kyara in Friendship and Psychological Adjustment: Comparison of Junior High School and University Students

YUTA CHISHIMA (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA ; RESEARCH FELLOW OF THE JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE) AND
TATSUYA MURAKAMI (FACULTY OF HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2016, 64, 1–12

Most contemporary adolescents communicate with their friends by using *kyara*, which is a shortened form of the Japanese pronunciation of the English word “character”. The purpose of the present study was to clarify relations between acceptance of *kyara* in friendship and psychological adjustment by comparing junior high and university students. Junior high school students ($n=396$) and university students ($n=244$) completed a questionnaire. The results suggested that the university students had a higher percentage than the junior high school students of use of *kyara* in friendship, and higher scores on sense of self-usefulness, compared to those who did not have a *kyara*. Factor analysis identified 4 factors in acceptance of *kyara*: active acceptance, rejection, indifference, and passive acceptance. The results of comparisons of scores and paths revealed differences correlated to educational level. The junior high school students tended not to accept their *kyara*, and performing with their *kyara* was related negatively to psychological adjustment. On the other hand, the university students’ performing with their *kyara* was not significantly related to any of the measures, and passive acceptance of *kyara* was related positively to the students’ sense of interpersonal rootedness.

Key Words: friendship, *kyara*, psychological adjustment, junior high school students, university students